

[017] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10251>

出版情報：語文研究. 17, 1964-03-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



編集後記

語文研究第十七号を世に送る。内容はご覧の通りであるが、特に広川・徳満・金原の新進三氏の論考がその中心となつて、はからずも平安文学小特輯の形をなした。春山氏の方丈記の文体に關する国語学的考察と共にご高評をいただければ幸いです。

ことし還曆をお迎えの福田先生は、新著「古代語文ノート」を公にされた。鶴氏の紹介にもあるように、学究の年輪が刻みこまれたこの論文集は質量ともに立派で尊く、また爽かである。先生にとっては二重のお慶びということになった。次号はお祝いの意味で特輯号を予定している。

学年末の雑務に追われ、新卒業生諸君を送り出して、歳々の早さに茫然としている間に、花は散り、春はたけて、樹々の緑が目にしみる頃となつてしまつた。文学部も四十年の住家を離れて、浜地区の新装なつた学舎に遠からず移ることになり、書庫も研究室も人待ち顔である。やがて新しい学問の風がそこから吹き初めることであらう。

おわりに二年間助手として研究室のお世話を願つた白石悌三氏が、このたび福岡大学勤務となり、代わつて原口裕氏がその後を引継がれたこと、本号発刊にあたり、文友会より金五千円の出版補助をいただいたことなどを報告して筆を収めるものである。

(春日)